

豊山学報・第六六号  
弘法大師御誕生千二百五十年  
記念特別号 抜刷  
令和五年三月発行  
真言宗豊山派総合研究院

「清浄」について―般若理趣経をめぐるその系譜―

大西 完善

## 「清浄」について―般若理趣経をめぐるその系譜―

大西 完善

はじめに

般若理趣経は、殊に真言宗徒にとつては最も親しいお経である、と言えるであろう。

真言宗で常用している般若理趣経は、不空訳の大乗金剛不空真実三昧耶経であつて、最澄・空海・円仁・円珍請来となつている。<sup>(1)</sup>

その内容を概略すれば、大乗清浄を宣明する十七清浄句に代表される欲望肯定ともとれる主張であつて、我々が生きんとする意欲・生命力の根源とも言える人間本来の様々な欲望をすべてまとめて受け容れる積極的生き方を肯定するもの、となつている。

一卷のまとめとも言うべき百字偈に、「大欲得清浄、大安楽富饒」とあり、大欲が清浄であるから大安楽がもたらされる、と解釈できる。

因に、大欲・大楽という言いまわしは、通常用いている欲・楽の概念とは異なつて、異なることを表わす表現であらう。

つまり、ここでとり上げる欲(望)が単なる欲望、即ち、通常の仏教において迷妄の原因でもあり成道の妨げとして否定されるべきものとされている数多のそれではない、という意味を含んだものか、と解釈される。

大は単なる数量の比較における表現ではなく、価値評価の基準からするそれである、と考えられる。

十七清浄句は、我々が日常生活で感受する様々な欲望の実態(殊に、この場合は、男女の性行為に焦点を合わせた如き感も強いのであるが)を幅広く拾い上げて列挙している格好である。

してみると、ありとあらゆる欲望を漏れ無くすべて網羅した総体を言いたいのである、とも解釈され得るが、ここで注目すべきが、清浄という価値判断である。

大欲・大楽の語は第十七段に至って初めて顕われ、百字偈であらためて宣明されている訳だが、いずれにしても、大欲が大楽をもたらす前提条件として認められるのは、大欲が清浄である故である、ということは確認せざるを得ない。

松長有慶博士は、大欲は「現実的な欲望を浄化した仏のもつ欲望<sup>(2)</sup>」と解釈され、清浄については、「本来空であり、自他の対立を超えた境地<sup>(3)</sup>」と指摘されている。

又、津田真一博士の原語 *visuddhi* (梵) を挙げての注釈によれば、清浄には、「普段は隠されているそのものの本来のすがた、本来の存在意味<sup>(4)</sup>」という意味がある、という。

我々が通常慣れ親しんでいる漢字の感覚からする清浄の意味は、あくまでも清く澄みきった美しい状態、と単純に見過ごしがちであるが、理趣経における清浄句の意味からして、清浄については、なお一層考察を深めてみる必要も感じられるのである。

般若理趣経が般若波羅蜜多思想の流れを汲んで密教思想を加味した成果であることは一般に認められているところ、と思うが、原意はさておき、時と処を異にして伝播されてきた経の趣意において「清浄」の語がどの

ようにとり上げられているか、を述べつけてみる作業も必要なのではなからうか。

この場合、通常我々が目にし理解する範囲における「清浄」なる語は至極明瞭単純である、と言つてさし支えない態のものであるから、その比較検討においては、勢いどういうもの・どういう状態を清浄と表現表記しているか、に自ずと焦点を合わせざるを得ないのではないかと推測される。

今、般若理趣経を中心としてとり上げるに当たつて、先ずは関連経典の整理をしておきたい。

理趣経の流れに連なるものとして挙げられるのは、梵本一、チベット(藏)訳四、漢訳六、の計十一本である。この中、略本とされる理趣経に対して広本とされるのは、藏訳三本、漢訳一本である。

出入・全欠は様々であるが、梵・藏訳の内容は、いずれも漢訳の内容として摂取されているようである。よつて、ここでは、主として漢訳諸経典の比較などを検討の資料として進めたい、と思う。

註

- (1) 密教辞典(佐和隆研)など
- (2) 理趣経―新国訳大藏経・密教部四 一三一頁  
加藤俊生氏も(善通寺教学振興会紀要二四号)「大欲は自他平等の境地を保つて衆生済度に努める姿であり、これこそが釈尊が衆生救済した発心である」(二〇頁)と言ひ「大悲の根拠は無自性であり、自他平等は自性清浄を根拠としている」(二三頁)と指摘して、自性清浄が衆生救済の慈悲行を発する根本条件となつてゐる、と解しておられる。
- (3) 上掲新国訳大藏経 一三三頁
- (4) 梵文和訳金剛頂経 三九、一四二頁

理趣經・閔連諸經 ※「密教經典成立史論」（松長有慶、一九八〇～二〇一頁）

「新国訳大藏經密教部四」（ク、一〇五～一〇七頁）

〈梵Ⅱサンスクリット〉

1、「百五十頌般若波羅蜜」

〈漢〉

1、大般若波羅蜜多經第五七八、第十般若理趣分（大正新脩大藏經Ⅱ以下正藏と略Ⅱ七No.三二〇、九八六頁上～九九一頁中）

2、実相般若波羅蜜經一卷（正藏八No.二四〇、七七六頁上～七七八頁中）

3、金剛頂瑜伽理趣般若經一卷（正藏八No.二四一、七七八頁中～七八一頁下）

4、大樂金剛不空真実三摩耶經一卷（正藏八No.二四三、七八四頁上～七八六頁中）

5、仏説徧照般若波羅蜜經一卷（正藏八No.二四二、七八一頁下～七八四頁上）

6、仏説最上根本大樂金剛不空三昧大教王經七卷（正藏八No.二四四、七八六頁中～八二四頁上）

〈西蔵Ⅱチベット〉

1、聖般若波羅蜜多の理趣百五十頌（東北四八九）

2、吉祥最勝本初（東北四八七）

- 3、吉祥最勝本初真言儀軌品（東北四八八）
- 4、吉祥金剛場莊嚴（東北四九〇）

- ・チベット訳2、3、4と漢訳6は広本である。
- ・同1は、内容が漢訳4にほぼ対応する。
- ・同2は、漢訳6の第一分から第十三分に相当する。
- ・同3は、漢訳6の第十四から第二十五分に相当する。
- ・同4の後半の一部分は、仏説金剛場莊嚴般若波羅蜜多教中一分||北宋・施護（AD九八〇〜九九〇）訳||（正藏一八No.八八六、五一頁中〜五一四頁中）として漢訳されている。

### 原始仏教I（スッタ・ニパータ、法句経）

一部が紀元前三世紀の半ばには既に成立していたと推測される最古の仏教聖典である「スッタ・ニパータ」<sup>(1)</sup>には「清浄についての八つの詩句」と称する一章があり、<sup>(2)</sup>「清浄」が仏教のそもそもの始まりの段階からその概念に関わる重要な術語であったことを伺わせる。

バラモンとも呼ばれる初期の仏教修行者は、清らかな行いを修めている人々であり、<sup>(4)</sup>究極して「最上の清浄」を見ることを目指して励んでいるのであり、<sup>(5)</sup>最上の清浄即涅槃（成道の達成）であると解されている。<sup>(6)</sup>

清らかな行いを重ねて究極の清浄を得るとは、貪欲や迷妄をしりぞけて心身の清浄を獲得することであり、<sup>(7)</sup>

欲望否定の主張は明確である。<sup>(8)</sup>

心身の清浄が究極の目標であるが、清浄の成否は見解によつて<sup>(9)</sup>いい、しかも貪欲・離欲にこだわらぬものではない<sup>(10)</sup>、とするところには、後に一切皆空を主張する考えにつながるものを想起させる<sup>(11)</sup>。

「スッタ・ニパータ」とほぼ同時代の成立と見られる法句経においても、無明は最大の垢穢であるとされ<sup>(12)</sup>、一切の事象の無常・苦・無我を観ずる時苦を厭離して浄に到り得る<sup>(13)</sup>、と説いている。

・清浄は修行者の目指す究極の目標たる境地であり、貪欲や迷妄を断ち切つた平静安寧の様態である。

・究極最上の清浄を獲得する為には、それを目指す道程においても清浄な心行を積み重ねてゆくことが求められる。

このことは、後に、手段或いは推進力としての五力、その目標・成果としての十地、その双方を共に清浄にからめて表現しているのが認められる<sup>(14)</sup>のと相応じている。

註

- (1) 「ブツダのごとば―スッタニパータ」中村元訳 四三五頁
- (2) 同 No.七八八〜七九五
- (3) 同 三二二頁
- (4) 同 No.二八三、四九三、五六六、六九六、七二七等
- (5) 同 九九〜一〇〇頁、No.六九三
- (6) 同 三七二頁
- (7) 同 No.四九三

「清浄」について (大西)

(8) 同 No.四三五

(9) 同 No.七八八

(10) 同 No.七九五、八三九

(11) 同 三八二頁

(12) 南伝大藏経 Ⅱ 以下南伝と略 Ⅱ 二三、No.二四三

(13) 同 No.二七七、二七九

(14) 金剛場莊嚴般若波羅蜜多教中二分、正藏一八 五二二頁中、五二三頁中

## 原始仏教Ⅱ (含、大乘仏教)

### 三輪清浄 (布施行について)<sup>(1)</sup>

「与える前はこころ楽しく、与えつつあるときには心を清浄ならしめ、与えおわつては、こころ喜ばし<sup>(2)</sup>」

「法になつて得た富を与えつつ、心清浄ならしめる<sup>(3)</sup>」

「求道者はものにとらわれて施しをしてはならない<sup>(4)</sup>」

施す人・施される人・施されるもの、この三つが清浄でなければならぬ、という。清浄とは滞らないということである、という。

「能施と所施と施物とは、三世のうちにおいて無所得なり。われらは最勝の心に安住し、一切十方のこころ

ろを供養す<sup>(5)</sup>」

つまり、一切空とも言うべきとらわれない心で行われるのが真の布施・清浄なる布施行というべきものである、という。

更にこのことを推し進めれば、「一に能く持戒の衆生なることを取らず（執着しない）、二に修行する所のこと  
に著せず、三に戒法に任せず<sup>(6)</sup>」という、生活全般にわたつての三輪清浄観にも達し得るのである。

又、同じ布施であっても、施与者と受者の関係性において、清浄と非清浄の違いが出てくる場合がある、と  
いう。

(1) 戒めをたもっている人が、たちの悪い人びとに与えるならば、かれは正しく施与して心喜ぶ——（施与という  
行為が広大な果報を生ずることを信じているから。このような施与は施与者に関して清浄となる。

(2) たちの悪い人が、戒めをたもっている人びとに与えるならば、かれは不正に施与して、心が喜ばない。（施  
与という行為が広大な果報を生ずることを信じていないから。このような施与は、受者に関して清浄となる。

(3) たちの悪い人が、たちの悪い人びとに与えるならば、かれは不正に施与して、心が喜ばない——（施与とい  
う行為が広大な果報を生ずることを信じていないから。このような施与は（施与者と受者との）両者に関し  
て清浄とはならない。

(4) 戒めをたもっている人が、戒めをたもっている人びとに与えるならば、かれは正しく施与して、心喜ぶ——（施  
与という行為が広大な果報を生ずることを信じているから。このような施与は広大な果報がある、とわれ  
は説く。

(5) 貪欲を離れた人が、貪欲を離れた人びとに施与するならば、かれは正しく施与して心喜ぶ——（施与という  
行為が広大な果報を生ずることを信じているから。このような施与は実に広大な財産である、とわれは

説く。<sup>(7)</sup>

施与ということは推奨さるべき徳行である。しかし、同じ施与にも清浄と非清浄とがあると考えられる。持戒の人が性悪の人に与えるならば、それは施与者について清浄である。逆に、性悪の人が持戒の人に与えるならば、それは受者にとっては清浄である、と言える。又、例えば、性悪の人が性悪の人に与える場合はどうかと言え、その場合は、施者受者双方共清浄とは言えない。

つまり、清浄と非清浄とは持戒か破戒かの違いによる、と言える。

・布施は、とらわれの無い心・無心・無我・無滞・空の心境で行われなければならない。

一切の我を捨て忘れて、十方一切に隔てなく施すことによつて真の布施・清浄なる布施は成立する。

・戒の摂持・不摂持によつて布施の相違が云々されるのは、そこに三輪についてのこだわり・滞りが予想されるところからではないだろうか。

註

- (1) 「仏典のことば」中村元 七〇～七二頁
- (2) 同 七〇頁(アングッタラ・ニカーヤ三三三七G)
- (3) 同 (同三五四G)
- (4) 金剛般若経(AD四C頃) 第四節(正藏八 七五三頁上)
- (5) 大乘本生心地観経(唐・般若訳、AD八一) 第一卷(同三 二九六頁中)
- (6) 大方広仏華嚴経疏(澄観AD七八四～七八七) 第十九卷(同三五 六四二頁中)
- (7) 前掲中村書 五九～六一頁、マツジマ・ニカーヤ三二二五七(南伝一八、増支部四集三、無戲論品、一四一～二頁)

## 原始仏教Ⅲ

### ・三業清浄について<sup>(1)</sup>

「身については、殺生・不与取・欲邪行・非梵行を為さず、語については、虚誑語・離間語・麤惡語・雜穢語を語らず、

意については、正見を持して、貪求せず、瞋恚・昏沈睡眠・悼拳惡作・疑惑をよく制御するを以て、洗除惡者と成り得るのである」

### ・第四禪の成就について<sup>(2)</sup>

「捨念清浄の第四禪は、樂苦を捨離し、喜悅・憂惱を滅して、不苦・不樂の受・心の無感興・心一境性等に到達することである」

### ・十法の清浄潔白について<sup>(3)</sup>

「八正道に正智・正解脱を加えた十法は清浄潔白である。この境地は、三毒を調伏し、一向厭患・離貪・滅尽・寂止・現証・等覺・涅槃に資し、未生にして生じ、大果・大功徳あり、としたものである」

### ・身口意の三業清浄については、避邪取正の選択・自己制御の尽力が求められる。

・第四禪の境地は、捨念清浄と呼ばれる如く、樂・苦・喜・憂を捨滅した無感興とも言うべき心一境性に到つたものである。澄明・中立・無礙の虚空とでも言うべき状態か。

・十法の価値は、調伏三毒・一向涅槃の働きを有するところにあり、未生にして生じ、自ずと大果大功徳をもたらすものである。

註

- (1) 増支部一・三集第二惡趣品(南伝一七 四四七〜四五〇頁)
- (2) ・中部・不斷經(南伝一二下 三頁)  
・増支部五・八集第二大品十一鞞蘭若(南伝二一 三七頁)
- (3) 増支部七・五十經第十三清淨品(南伝二三下 一六七〜八頁)

## 大乘仏教 I

### 「涅槃は清淨」について(大般涅槃經、勝鬘經)

大樂は理趣經でも言及されており、成道(涅槃)の一風光である、と解されるが、涅槃經においては、大樂あるが故に大涅槃あり、として、大樂の四条件、一、諸樂を断つ、二、大寂靜、三、一切智、四、身不壞、を挙げている<sup>(1)</sup>。

又、如来は純淨であり大淨であるから大涅槃ありとせられる、といい、一、永断二十五有不淨、二、業清淨、三、身清淨、四、心清淨、の四清淨(≡純淨・大淨)を挙げている<sup>(2)</sup>。

つまり、成道(成菩提)の一成果としての大樂には、清淨という状態は欠くべからざる前提条件である、ということを力説しているが如くである。

なお、断諸樂に注して、無苦無樂としてあるところからみれば、樂とか苦とか主観的価値判断を超越した境

「清淨」について(大西)

地を指しているようであり、大寂靜に注して、遠離一切憤鬧法として<sup>(3)</sup>いるのも同様で、徒に心乱されぬ状態を理想としたものが清淨であるということを表わしている、とみられる。

又、勝鬘經においても、如来藏を自性清淨藏とい<sup>(4)</sup>い、如来のみの仏果としての槃涅槃を、一切の断すべき過を悉く断滅して第一清淨を成就せるもの、と表現している<sup>(5)</sup>。

・清淨は涅槃の風光を描写したのだが、我々が通常理解する感覚的印象は勿論当たっているにしても、もう一步踏み込んで、心の状態ともいべき全人格の行動規範として働く心理状態の領域をも網羅したものに<sup>(6)</sup>なっている、と感ぜられる。

#### 註

- (1) 大般涅槃經 (A D 四二二 曇無讖訳) 卷第二十三、光明遍照高貴徳王菩薩品第十之三 (正蔵一二 五〇三頁上〜中)
- (2) 同、五〇三頁下
- (3) 同、五〇三頁中
- (4) 勝鬘獅子吼一乘大方便方広經 (A D 四三六 漢訳) 自性清淨章第十三 (正蔵一二 二二三頁中)
- (5) 同、一乗章第五 二一九頁下

## 大乘仏教 II

### 六根清淨 (妙法蓮華經・法師功德品第十九)

法師功德品においては、法華經受持・読誦・解説・書写の功德として六根の清浄を獲得し、それぞれの機能において超能力とも言うべき極限的能力を獲得し、理想的な境地に生きることが可能になる、ことを説いている。<sup>(1)</sup> 清浄は、生得の能力を極限まで發揮して理想の生を全うする根本条件として認識されるもの、と言えるであろうか。

註

(1) (AD一c半〜二c半) 正藏九 四七頁下〜五〇頁中

## 大乘仏教Ⅲ

### 清浄の菩薩ということ (大智度論)

「衆生を憐愍し、世界を護持し、菩薩の(特別の)法なしといえども、つねに世法を行ず。この因縁を以てのゆえに、皆な菩薩に基づきてあるなり。

問うて曰く、菩薩は清浄にして、大慈悲を行ず。(しかるに)いかにして世俗のもろもろの雑法を説くや。

答えて曰く、二種の菩薩あり。一つは慈悲を行じて直ちに菩薩道に入り、(第)二は敗壞の菩薩にして、また(慈)悲心あり。治むるに国法を以てし、利を貪るところなし。(ひとを)悩ますところありといえども、(そ

れによって）安んずるところの者も多し。一の悪人を治（罰）して、（その職務により）以て一家を成す。かくのごとくに法を立つる人を、名づけて清浄の菩薩とはなさずといえども、敗壞の菩薩と名づくることを得。この因縁（わけ）を以てのゆえに、みな菩薩に由つてあるなり」<sup>(1)</sup>

菩薩と呼ばれる者は通常清浄な者である。

何となれば、菩薩は大慈悲を行ずるからである。一方、清浄ならざる菩薩もある。それは敗壞の菩薩とも呼ばれる。その違いはどこにあるかといえば、清浄の菩薩は直接衆生の救済・福利増進に資するところあるに對し、敗壞の菩薩は、同じく衆生を利し保護するところあるにしても、罰則等の国法などを介しての間接的な働きかけによってである、と見られる。

・清浄と敗壞の違いと言え、清浄とは、純粹な慈悲心の自らなる発動の結果としての行動であるのに対し、敗壞と称せられるそれは、目的の達成は同様であるにしても、大衆の従わざるを得ない国法等の規制・規範等を手段としてそれを遂げようとする間接性によるものか、と思われる。

註

(1) 大智度論（鳩摩羅什A D三五〇～四〇九訳）第三六卷、積習相應品第三之余、正藏二五 三三三頁下

「仏典のことば」中村元 一八〇～一八一頁

理趣經の流れを先導する般若思想の淵源を成す大般若經に先行するかと思われる般若經典類の中にも、項目をたてて清浄をとり上げたものが散見される。

例えば、道行般若經卷第三、清浄品第六、では、

「心は本清浄にして能く所作有るべし、善男子善女人、諸著を離るるを以て本際を棄つると為す。……其本は甚深清浄なり……今自ずと般若波羅蜜に帰す。……法は作者無きが故に……無有の両法、用の本浄なる故に一と為すと曰う。其の浄とは一切に於て作者乃至無浄有ること無し。一切に於て亦作者無ければ、仏須菩提に語る。是を以て諸著を離れ本際を棄つることを為す、と」<sup>(1)</sup>

又、仏母出生三法藏般若波羅蜜多經卷第八、清浄品第八之一では、

「般若波羅蜜多最上甚深なるは性清浄なるが故に、般若波羅蜜多の……無和合……無所得……無所証……不生欲界色界無色界……畢竟不滅……無所了知なるは性清浄なるが故に。……般若波羅蜜多の色を知らず受想行識を知らざるは、色受想行識の性清浄なるが故に、……般若波羅蜜多の一切智において無起無作なるは、性清浄なるが故に、般若波羅蜜多の無法にして取るべく無法にして捨つべきは性清浄なるが故に。……我清浄なるが故に色清浄なるは、畢竟浄なるが故に、……我清浄なるが故に果清浄なるは畢竟浄なるが故に、……我無辺なるが故に色亦無辺なるは畢竟浄なるが故に、……菩薩摩訶薩は般若波羅蜜多において覺了する所無し。……般若波羅蜜多の此岸にも彼岸にも中流にも非ずして所住無きは畢竟浄なるが故に」<sup>(2)</sup>

・般若波羅蜜多は、対象を正確に覺知了解して自己の覺醒を促すがための一つの手段ともいうべき叡智であらう。

それは、強いて言えば、或種の技巧・技術を含んだ能力とでも言うべきものであろうか。

従つて、それ自体を表現するとすれば、無色透明であらゆる場面・あらゆる物体に対して誤りなく充機能する能力を備えているもの、中立・無規定の空なるもの、ということにならうか。

それが自性清浄・本性清浄という表現で示されている意義である、と解される。

註

(1) (後漢、支婁迦讖訳AD二七九) 正蔵八 四四二頁下

(2) (宋、施護訳AD九八五) 正蔵八 六一六頁中々下

## 大般若経(1)

・「世尊は、諸菩薩の為に一切法甚深微妙般若理趣清浄法門を説く。……此の法門は即ち菩薩を意味する言葉である。……何となれば、一切法は自性空であるから自性は遠離しており、遠離しているが故に寂靜であり、寂靜であるから自性清浄であり、清浄であるが故に甚深般若波羅蜜多は最勝清浄なのであり、このような般若波羅蜜多こそ菩薩を意味する言葉そのものであると知るべきである」<sup>(1)</sup>

・「仏は、是の如くの菩薩を意味する言葉、即ち般若理趣清浄の法を説いて、金剛手菩薩等に告げて、若し此の一切法甚深微妙般若理趣清浄法門を深く信受する者は、必ず妙菩提座に坐すことになるであらう、と言われた」<sup>(2)</sup>

・「世尊は復た、遍照如来の相に依つて諸尊の為に般若波羅蜜多一切如来寂靜法性甚深理趣現等覺門を説かれ

た。……法平等性現等覺門とは、大菩提の自性浄なるを以て、一切法平等性現等覺門とは、大菩提が一切法において無分別なるを以て、仏はかくの如くの寂靜法性般若理趣現等覺を説かれたのである<sup>(3)</sup>」

・一切法は自性空であるから自性は遠離しており、遠離しているから寂靜であつて、寂靜であるから自性清浄なのであり、それが般若波羅蜜多最勝清浄を可ならしめ、このような般若波羅蜜多こそが菩薩そのものと言えるのである。

・言い換えれば、この理を深く信受する者こそが必ず菩提座に坐し得る菩薩と言える、というのである。

・大菩提の自性清浄なるは、そのまま一切法の平等・無分別を表している。

註

(1) 大般若波羅蜜多經・第五七八・第十般若理趣分、正蔵七 九八六頁中〜九八七頁中

(2) 同 九八七頁中

(3) 同 中〜下

### 実相般若經 (2)

- ・「仏の説法は、初中後善にして、其義深遠・其語巧妙・純一無雜清浄円満である<sup>(1)</sup>」
- ・「大菩提は自性清浄であるから、一切平等に正覺を成ずるのである<sup>(2)</sup>」
- ・「一切法の自性は清浄であるから、般若波羅蜜多は清浄なのである<sup>(3)</sup>」

- ・「般若波羅蜜は究竟の方便智であつて、能く清淨の業を成す。普く諸有を淨め、諸世間を調伏し、有頂天に至るまで、清淨で違暴無く、生死の世に於て世法に染せられず、蓮華の妙色の如く塵垢に汚されず、大欲もて人を清淨ならしめ、大施もて人を安樂ならしむ」<sup>(4)</sup>
- ・「世尊は、一切如来の自性清淨相を以て、諸菩薩の為に一切法平等性の觀自在智印実相般若波羅蜜法門を説く」<sup>(5)</sup>
- ・「一切世間の貪性・瞋性が清淨であるから、一切世間の垢性・罪性も清淨であり、更に一切世間の法性・衆生性が清淨であるから、一切世間の智性が清淨であり、即ち般若波羅蜜が清淨ということになる」<sup>(6)</sup>
- ・一切法の自性清淨が般若波羅蜜多清淨の根本である。
- ・般若波羅蜜多は、一切世間の垢穢・罪障も法性・衆生性・智性と同じく清淨であるという平等性において、如来の智慧たり得るのである。
- ・自性清淨という平等性が成覺の基本要件となっている。

註

- (1) 実相般若波羅蜜經、正藏八 七七六頁上
- (2) 同中
- (3) 同
- (4) 同 七七八頁上
- (5) 同 七七六頁下
- (6) 同

瑜伽理趣 (3)

- ・「世尊は、諸菩薩の為に一切法自性清浄般若波羅蜜多理趣法門を説く。此門は即ち、それぞれの境地が清浄であることを言い、それはそのまま菩薩を意味する言葉ともなる<sup>(1)</sup>」という。
- ・「世尊は、一切如来自性清浄相により、諸菩薩の為に、一切法平等性観自在智印般若波羅蜜多理趣法門を説く<sup>(2)</sup>」
- ・「一切貪性・瞋性・垢性・罪性・法性・有情性・智性が清浄なるが故に般若波羅蜜多は最勝清浄であり、仏は、かくの如くの平等智印般若理趣の清浄法を説く<sup>(3)</sup>」
- ・一切法清浄の覚知は菩薩たるの必須条件であり、その平等性により般若波羅蜜多理趣法門とも称されるのである。

註

(1) 正蔵八 七七八頁下

(2) 同 七七九頁中

(3) 同

般若理趣経 (4)

「毘盧遮那如来は、大菩提が自性清浄であるから、法平等の現等覚を出生する般若の教えを説く<sup>(1)</sup>」

「自性清淨の法性を得た如来は、また、一切法の平等を觀すること自在なる智慧のしるしを生み出す般若の教えを説く。

それは、世間一切の欲・一切の瞋・世間一切の垢・一切の罪・世間一切の法・一切有情・世間一切の智智が清淨であるから般若の智慧は清淨なのである」<sup>(2)</sup> ということである。

・大菩提即般若波羅蜜多と解されるが、その自性は清淨である。

清淨なる実態はどういうものであるかといえは、寂靜でもあり、何よりも平等であることを特徴としている。平等とは、世間一切の欲・世間一切の垢染も、一切法も一切有情も一切智智も皆等価値を以て存在している、ということであろう。

一切清淨の確認こそが成菩提の必須要件である、と解されるのである。

註

(1) 正藏八 七八四頁中、下

(2) 同下

## 遍照般若(5)

・「世尊は欲界の他化自在天宮に在して、菩薩摩訶薩の為に、其義深遠・其語巧妙・純一無雜にして清白を具足せる菩薩一切清淨の法門を説き給う。それぞれの境地は皆清淨であつて菩薩に異らず、一切法自性空自

性清浄と言えるのは、般若波羅蜜も自性空自性清浄であるからである<sup>(1)</sup>」

・「仏、金剛手菩薩に告ぐ、若人此の般若波羅蜜を聴聞受持読誦懷念せば、当に阿耨多羅三藐三菩提を証して、説く所の一切法門は秘密卍字義門に入り、その時、自性清浄如来は、復た一切法聚觀自在智印般若波羅蜜經を説く。即ち、世間一切の貪・瞋・垢・罪・衆生・法・智・すべて清浄なるを以て、般若波羅蜜清浄と云うのである<sup>(2)</sup>」

・「一切法戲論如来が転輪字般若波羅蜜經を説くとは、一切法は無性・無相・無作・無願の故に一切法本来清浄であつて、般若波羅蜜は清浄なのである<sup>(3)</sup>」

・一切法自性清浄は菩薩の境地であり、即ち自性空・般若波羅蜜清浄とも通じているのである。  
・無性・無相・無作・無願・即ち一切無の境地が一切法清浄に通じている、ようである。

註

(1) 正藏八 七八一頁下〜七八二頁上

(2) 同 七八二頁中

(3) 同 七八二頁下

### 最上根本大樂 (6)

・「世尊大毘盧遮那仏は、他化自在天宮に在して、金剛手菩薩摩訶薩等諸大菩薩等の為に一切清浄の法門を

説き給う。これらはすべて覚りの境地を表わしたもので、諸法の自性が清浄であることの証明ともい  
べきであり、諸法の自性が清浄であることは、とりもなおさず般若波羅蜜多も清浄である、ということ  
である<sup>(1)</sup>」

・「釈迦牟尼仏は一切法平等最勝摂般若波羅蜜多法門を説き給う。即ち、貪・瞋・痴・諸法皆無性なるを以て、  
般若波羅蜜多も無性なのである」<sup>(2)</sup>

・般若波羅蜜多の了得が成覚の必須条件とするならば、諸法の無性即ち諸法の清浄を覚知することがその必  
須階梯となる。

註

(1) 卷第一、正蔵八 七八六頁下

(2) 卷第二、同 七九〇頁中

## チベット訳

チベット訳「吉祥金剛場莊嚴」によれば、「無苦楽・捨悦愔意・住一境性・無尋・無伺の心境において定ん  
で喜楽を生じ得るのであって、それこそが内心清浄に止息することである<sup>(1)</sup>」としている。

又、菩薩の極地たる十地を挙げ、

「如<sup>レ</sup>是十地即一切地而同一義。所謂智義。即此智義亦無<sup>二</sup>所有<sup>一</sup>。無相無文字無声無名。不<sup>レ</sup>可<sup>二</sup>記別<sup>一</sup>本来清浄。

現<sup>二</sup>無垢光<sup>一</sup>住<sup>二</sup>真実義<sup>一</sup>。此名<sup>二</sup>地清浄般若波羅蜜多教<sup>一</sup>」<sup>(2)</sup>といひ、  
信力・精神力・念力・定力・慧力の五力については、

「如<sup>レ</sup>是五力。即一切法平等行。於<sup>下</sup>一切力悉離<sup>二</sup>戲論<sup>一</sup>本来清浄<sup>上</sup>。此名<sup>二</sup>力増般若波羅蜜多教<sup>一</sup>」<sup>(3)</sup>とし、いづれも區別限定をする類の戲論を離れて、無垢光の真実義たる清浄にこそその根拠を置いているのである、といつてゐる。

註

(1) 仏説金剛場莊嚴般若波羅蜜多教中一分、正藏一八 五一三頁上

(2) 同 五一三頁中

(3) 同 五一二頁中

密教 I 大日經

・「真言を持する行者は、次に悲念の心を発し……菩提心の清浄にして無我に中るを思惟し、或いは夢中に菩薩の大名稱を見る」<sup>(1)</sup>

・「世尊は、復た諸の大衆会に向い、一切の願を満足せしめんとして、復た三世無量門決定智円満の法句を説かれた。

虚空は垢無く自性無く能く諸の功智を授く。本より自性は常に空なるが故に、縁起は甚だ深くして見る可

きこと難し。……譬えば一切の空寂に趣くが如く、皆虚空に依り著無くして行う。此の清淨の法も亦是の如く、三有余すこと無くして清淨を生ず。昔の勝生此を嚴修する故に、一切如来の行有ることを得。他に非ざるの句有りて得べきこと難し。世の遍明を作すこと世尊の如し。清淨を極めたる修行法を説き、深広尽くる無く分別を離る<sup>(2)</sup>」

・「本尊の身に亦二種有り。所謂清淨と非清淨なり。彼の淨身を証すとは、一切の相を離るるなり。非淨有想之身は則ち顕形衆色有り。彼の二種の尊形は、二種の事を成就す。有想の故に有相の悉地を成就し、無想の故に随つて無相の悉地を生ず。

仏有想を説くが故に樂欲は有相と成り、無想到に住するを以て無相の悉地を獲。是の故に一切種当に非想到に住すべし<sup>(3)</sup>」

・一切の諸願を満足せしむる法とは、虚空の如く無著・不偏・空寂の境地より出づべきであり、それをしも清淨と表すのである。

・説法主たる清淨なる本尊身の有り様は、有無の弁別を離れた非想の境地にこそあるべきである。

・真言行者が菩薩道を歩むとは、他を思いやる悲念と共に、判断を誤らぬ無我なる清淨に思いを至さねばならぬ。

#### 註

(1) 大毘盧遮那成佛神變加持經(唐、善無畏・一行訳、AD七二四)卷第一、正藏一八 五頁中

(2) 同卷第三 一七頁下〜一八頁上

(3) 同卷六 四四頁上

密教Ⅱ 金剛頂經（一）〈津田真一訳〉

「大毘盧遮那如来は、自性清浄なる一切法を内包している一切如来の身体が清浄であることにより、完全・無等・無上なる一切業者として働き得るのである」<sup>(1)</sup>

このことは、法曼荼羅の十六尊の一として一切如来の大清浄法を掲げ、更に確認されている。<sup>(2)</sup>

又、一切如来たちと自分達があらゆる点で完全に平等であることを認識することによって、本性清浄なる智慧の源・正等覚者たり得るのである、<sup>(3)</sup>という。

更に、「金剛薩埵の三昧は自性清浄法平等性智によく通達したものである」<sup>(4)</sup>とは、平等性の覚知が清浄の条件であることを伺わせる。

衆生の心臓上に月輪として表象される心は、たとえ現に煩惱によつて染汚せられているにしても、それが本来清浄であることは間違いないのである。その認識を増大せしめんが為発菩提心の眞言を誦するのである。<sup>(5)</sup>

金剛薩埵の三昧（覚りの境地）が衆生を度する手段としての諸法の清浄の獲得である、とは、清浄に注して「本来の存在意味」としてあり、<sup>(6)</sup>清浄が諸法の根源的境地・価値に通じるものであることを示している、と思う。

「世尊が無余一切の衆生界に入り、一切の安楽と満足を領受せしめる三昧に入る、とは、一切諸仏が一切諸法を清浄ならしむるところのものである」<sup>(7)</sup>とは、清浄が衆生救度の究極の手段たる価値であることを表しているのではあるまいか。

「愛欲を離れたものたちを更に清浄ならしめんが為、それらを貪愛を以て調伏す」<sup>(8)</sup>とは、ここでいう貪愛が

「清浄」について（大西）

通常しりぞけらるべき害毒としての愛欲を昇華せしめるが如き働きを表わすもので、後に大欲とも称されるようになる衆生教化の力を含んだ肯定さるべき欲望を指すのではないか、と推測される。

同様に、「世尊は無余一切の衆生の魂を完全に清浄ならしめるため、その貪欲の自性が穢れなく清浄である(9)という、貪欲の真実義を覚らしむる三昧に入られる(10)とは、通常しりぞけられるべき衆生の貪欲の実義を見きわめて、覚醒成道へ向う一原動力としての貪欲の生かし方・価値転換を覚知すべきことを示唆しているのではないか。

- ・ 大日如来の活動、それはすべての衆生を覚醒せしめん、即ちあるべき姿において安寧せしめんと願いともいうべきものであるが、それを可能にする前提条件たるべきものが、自性清浄という既定の事実である。
- ・ それは平等であり本源ともいうべきものであつて、貪欲ともいうべき強い意志・行動によつて獲得すべき  
平静・安寧の境地である。
- ・ 自らの本質たる心身清浄を見極め自覚することから覚醒への歩みは進められる、ということである。

註

- (1) 梵文和訳・金剛頂経 (AD7c 末、8c 末) 『密教経典成立史論』松長有慶 一九五頁 津田真一 六、七頁
- (2) 同 七頁
- (3) 同 一六頁
- (4) 同 三八頁
- (5) 同 一二頁
- (6) 同 三九、四二頁

(7) 同 四四、一〇二頁

(8) 同 二六頁

(9) 同 五九頁

(10) 同 四〇頁

### 密教Ⅲ 金剛頂經(2)

- ・「一切如来の身、自性清浄なる故に、自性清浄なる一切法、一切虚空に遍じ、能く一切色智を現じて、尽く余すところ無く有情界を調伏して最勝を行ず」<sup>(1)</sup>
- ・「一切如来は大清浄法である。一切如来は般若智である」<sup>(2)</sup>
- ・「奇なる哉、自性は清浄にして、欲に染まるの自然に随う。欲を離るれば清浄なる故に、染するを以て調伏せん、とは。……時に世尊、一切如来随染加持に入り、金剛三昧地と名づく」<sup>(3)</sup>
- ・「奇なる哉、我が勝義は本より清浄自然にして、諸法は筏の喩の如く清浄にして得べし」<sup>(4)</sup>
- ・「奇なる哉、一切仏の法金剛なる我浄は、自性清浄により貪染を無垢ならしめん、とは」<sup>(5)</sup>
- ・一切如来は自性清浄なるを以て、一切法・一切虚空に遍じ、有情の調伏教化を為し得るのである。
- ・一切如来は大清浄法そのものであり、それこそが般若智と呼ばれるものに外ならない。
- ・本来自性清浄なる本性が貪欲に染汚されて営為しているのが衆生の実態である。これを覚醒・拔濟せしむるに、一方便として欲染の境に入る、という手段もあり得る。

・如来の勝義の衆生拔濟における働きは、清浄自然なるによつてであり、それは丁度、渡河に際しての筏の如く、その目的を達しさえすれば、その有無すら問題とされない態のものである。

註

- (1) 金剛頂一切如来真実撰大乘現証大教王經（不空訳A D七四六〜七七四）卷上、正蔵一八 二〇七頁中
- (2) 同
- (3) 同 二〇九頁中
- (4) 同 二二一頁上
- (5) 同・卷中 二二四頁上

#### 密教IV 空海をめぐつて

真言宗では、自性清浄心を本尊とたてる言説も見受けられる。即ち、

「我が本来自性清浄の心は世間出世間に於て最勝最尊なり。故に本尊と曰う。又已成の仏の本来自性清浄の理も、世間出世間に於て最勝最尊なり。故に本尊と曰う。仏と我と無二無別なり。乃至一切衆生各別の身中の本来自性清浄の理も、世間に於て最勝最尊なり。我と仏と及び一切衆生と無二無別なり。是れ三平等の心なり」<sup>(1)</sup>

とある。

「三昧耶戒序」において、真言乘に入門志望する者は先ず信心・大悲心・勝義心・大菩提心の四心を発すべきであるとし、釈摩訶衍論の信の十義を挙げ、その第一たる澄浄につき、よく心性清浄明白ならしむる、としている。

これは「二教論」<sup>(4)</sup>において、大智度論<sup>(5)</sup>を引いて「衆生の心清浄なるときはすなわち仏を見、もし心不浄なるときはすなわち仏を見ず」としているのに通じるものであり、心性清浄なことが求菩提のそもそもの出発要件である、と解される。しかもこの清浄は、「修行を待たず、勤念をからず本具のもの、自得のもの」<sup>(6)</sup>であつて自ら既に身につけて得ているものである、<sup>(7)</sup>というのである。

これはそのまま実相般若経にもいう一切諸法自性清浄の謂であり、「我三業本来清浄」<sup>(8)</sup>ともなり、「諸法本不生」の境界にも通じている。<sup>(9)</sup>

つまり、清浄とは、菩提心を発せんとする我々が、その出发点に置かれている本来無限定無条件なる心身の状態をさしているものと解され得るのである。

このことは、「菩提心即ち清浄法身なり」と観ずる時、それは生滅無く、言説・名字・心縁をも離れたものであり、妄心流転を脱して開発照悟するに及んで初めて到達できる境地である<sup>(10)</sup>といつて、一層明確に理解される。

・即事而真の立場から即身成仏を説くに至つた空海には、究極の清浄即仏性を凡常のそここに認めるが如き言説があるのは、当然と言えば当然と言えようか。

即ち、「いわゆる菩提心とは、すなわちこれ諸仏の清浄法身なり。またこれ衆生の染浄の心なり」<sup>(11)</sup>

「衆生界を離れて法身あるにあらず、法身を離れて衆生界あるにあらず、衆生界すなわちこれ法身なり。

法身すなわちこれ衆生界なり」<sup>(12)</sup>

「衆生界の清浄なるはまさに知るべしすなわち法身なり。法身すなわち涅槃なり。涅槃すなわち如来なり」<sup>(13)</sup>

等であり、それに気づくことが覚醒とも成覚ともいうべき状態であり、それを可能にするのは、「無分別智のみよく証す<sup>(14)</sup>」という。

・ 発（菩提）心の根底は心性澄浄である。

・ 澄浄とは無生滅無限定であつて、その覚知こそが清浄の獲得に外ならない。

註

- (1) 秘藏記（AD九〇〇頃）本尊義、弘法大師全集Ⅱ以下弘全と略すⅡ 一四四頁
- (2) （AD八二三頃）弘全五 四頁
- (3) （AD八c前半）卷一、正藏三二 五九七頁上
- (4) 弁顕密二経論・卷下（AD八一五以前）弘全三 一〇八頁
- (5) 卷九、正藏二五 一二六頁中
- (6) 平城天皇灌頂文（AD八二三頃）弘全五 一八頁
- (7) ㊦秘藏記、弘全五 一二二〜一二三頁
- (8) 同 一三七頁
- (9) 法華経開題―開禾茲大乘経、弘全四 一五九頁、同―重円性海、弘全四 一七二〜一七四頁
- (10) ㊦秘密三昧耶仏戒儀（AD八二三頃）弘全五 一六五〜一六六頁
- (11) 同 一六五頁
- (12) 同 一六六頁Ⅱ 仏説不増不減経（唐・菩提流支訳、AD六九九）正藏一六 四六七頁中
- (13) 同 一六六頁
- (14) 弁顕密二経論下、弘全三 九五頁

## おわりに

原始仏教において見られるところの「清浄」とは、日々の生活において、恣な欲望に振り回されるようなことの無い様自己を規制した状態に保つこと、そのようにして生活の破綻をきたさないようにする生きる智恵、ともいうべきもの、となつてゐる。だからこそ、生活の革新を目指して修行に励む者を清浄者と呼んでゐる。

やがて物品の授受や奉仕の場面における心遣いに及び、正しく整えられた生活から必然的に生ずる他者への思いやりを中心とした自らの心の安定を保つてゐる状態を清浄と呼ぶ、こととなつてゐる。

しかも、心の安定を保つという観点からすれば、外からの刺戟ともいふべき欲望の誘惑を断ずる上においても、それにこだわる態度を克服する境地に至ることが望まれる、とする。ここには、後に空観として般若思想で強調されるようになる考え方の萌芽を認めることもできる。

心身の清浄は原始仏教以来理想の要件として言及されているが、大乘經典の護持伝播においても、その根本要件として求められることとなつてゐる。

仏教修行者が理想として目指す覚醒の極地たる涅槃・成道は大衆とも称し得る境地であるが、その出発点は純浄・大浄とも言われる所から発しており、煎じ詰めれば、本性清浄から発するのである、とも言い得る。

つまり、自性清浄であるから極清浄たる涅槃は可能なのである、というのである。これは、とりもなおさず、生得の資質として仏性は備つてゐるのである、という如来蔵思想に他ならない。

抜苦与樂の慈悲行を指標に掲げる所謂大乘仏教の立場は、他者への働きかけを眼目としてゐる、と言つてよ

いであろう。その場合、自身の心情の発露に従って直接直ちにその行動を為すのと、何か他の仕組みや力をかりて為すのを区別し、直接的慈悲行を以て清浄と称していることにも注目しておきたい。

「諸著を離れ本際を捨つることにより、能く所作あり般若波羅蜜に帰すとす」<sup>(1)</sup>

「般若波羅蜜の無和合・無所得・無所証・無所了知にして、一切智においても無起無作なるは、本(自)性清浄なるが故に可なのである」<sup>(2)</sup>とは、我もそれに対峙する色も双共に無辺にして所住無きが如く、畢竟空とも言うべき状態にあり、これも皆性清浄なるによつて可なのである、という。

「一切法は自性空であるから遠離しており、遠離しているから寂靜であつて、寂靜であるから自性清浄であり、清浄であるから般若波羅蜜多は最勝清浄であり、これこそ菩薩と称してもよいものである」<sup>(3)</sup>という。

菩薩とは人間の理想的な生き方を表したものであるが、それが空無ともいうべき絶対の境地である清浄に発し清浄に帰している、と言つてよいであろう。

「一切平等に皆共成道を可能ならしめるのは、大菩提が自性清浄であるからである」<sup>(4)</sup>

「般若波羅蜜は究竟の方便智であつて、普く諸有を浄め、世法に染せられず、大欲もて人を清浄ならしめ、大施もて人を安樂ならしむ」<sup>(5)</sup>と。

一切衆生の等しく成道が可能なのは、大菩提自体が清浄であるからである。つまり、清浄は平等であり融通性・柔軟性に富んだもの、と言えるであろう。最勝の清浄である般若波羅蜜を介して人は安樂を獲得するのである。

「一切世間の貪・瞋・痴・垢・罪・法・衆生・智は皆清浄であるから般若波羅蜜多は清浄なのである」<sup>(6)</sup>

つまり、世の中には棄捨・廃棄すべきものは一つも無いのであつて、通常の善悪・正邪・好悪等の対立すべき価値観は共に同じく覚醒への契機として、平等にその存在意義を有しているのである、ということであろう。

「一切法は無性・無相・無作・無願である故に本来清浄である」<sup>(7)</sup>

般若波羅蜜の清浄は、一切法の無規定性とも言うべき在り様に根拠を置いているのである。

大日経において、本尊身の清浄と非清浄をいい、「清浄とは一切の相を離れ無想に住するもの」として<sup>(8)</sup>。中立・無規定・虚空の如きもの、というべきか。

金剛頂経において、「大日如来は自性清浄なる一切法を内包している一切如来の身体が清浄であることにより、完全・無等・無上なる一切業者として働き得る<sup>(9)</sup>」としている。

この境地は、「自性清浄法平等性智によく通達したもの<sup>(10)</sup>」とも言われる。

「衆生の心が現に煩惱に染汚されていても、それは実に本来清浄なのである。この認識を常に確認せんが為発菩提心の真言を唱えるのである<sup>(11)</sup>」

「諸法の清浄の獲得が衆生を度する手段ともなる<sup>(12)</sup>」

衆生救済に働く仏身は清浄である。それは一切諸法自性清浄を覚知・内包しているからである。衆生の身心も同じく自性清浄を根幹としているから、そこに如来の働きかけが功を奏して、衆生の覚醒・救度が可能となるのである。

発菩提心・即ち出発点ともいふべきは、心の澄浄に求められる、が、実はこれは生得既得の本来的なものである、ということの認識覚知こそが肝腎である。つまり、我々は本来既に浄菩提心なる仏と同等の資質・条件を与えられているのだという覚醒こそが重要なのである。

註

(1) 道行般若経・卷三、正蔵八 四四二頁下

(2) 仏母出生三法蔵般若波羅蜜多経・卷八、清浄品第八之一、同 六一六頁中

- (3) 大般若波羅蜜多經・第五七八卷、同七 九八七頁中
- (4) 同 九八七頁中、下
- (5) 実相般若波羅蜜經、同八 七七八頁上
- (6) 同 七七六頁下
- (7) 遍照般若波羅蜜經、正藏八 七八二頁下
- (8) 大毘盧遮那成仏神變加持經・卷六、觀本尊三昧品第二八、同一八 四四頁上
- (9) 津田前掲書 六、七頁
- (10) 同 三八頁
- (11) 同 一二頁
- (12) 同 三九頁

### まとめ

「清淨」という語は、ごくありふれた形容詞であり、見た目や触れた感じの心地好きを表している肯定すべき価値を示す言葉、と言つてよいであろう。

一つの目標を目指して一筋の道を歩み行く、修道とでもいうべき仏教の教理を説き示す仏教經典のそこそこに散見せられるのも当然、と言つてもよいかも知れぬ。珍しくないからともすれば見過ごされがちであるが、般若理趣經をめぐる一連の經典群においては、「清淨」がかなりの比重を以てとり上げられているのも事実である。

大まかに言えば、そこでは、人が生きてゆく上でどうしても対処しなくてはならぬ事物に対する感受性を中心に、基本的には、すべてを肯定的に受け容れ誤ちの無い行動・生活を達成してゆこうとする傾向を読みとれるように思う。

仏教の始原に遡れば、修行の成果として、恣な願望を制御し、定められた戒律を遵守して安定した生活・正しい社会人としての生き方を達成した、心身の整えられた完成型を指し示す評価とでも言うべき言葉であったようだ。

生きようとする動物的本能・生命力は旺盛なることが望ましい。しかし、その強さや勢いは、適当に制御されなくては却つて自らを破滅に導くきつかけともなりかねない危険性をもはらんだものである。

そこで、意志の力、湧き上がりくる欲望を適正に制御し正しく方向づける心の持ち様・働かせ方が重要な課題となる。正確に抑制・選別整理・捨棄という作業をこなしてゆく心の修養が求められる所以である。

こうした方向性を突きつめた涯に到達した安定した価値・拠るべき基準となり得たのが、あらゆる限定・規定を拒絶するが如き、自性清浄即般若波羅蜜多即空即浄菩提心即如来藏即涅槃といったものではないだろうか。<sup>(1)</sup>

註

(1) ⑤ 「また阿卑囉吽劍の五字の所成なり。一一を取るに任せて、自性清浄心とも、真如とも、仏性とも、如来藏とも、法性とも觀ずべし」(秘藏記、弘全五 一三六頁)

5	4	3	2	1	訳出
九九一 施護	七六三〇七七 不空	七二三〇 金剛智 七四一	六九三 菩提流支	六六〇・二〇 六六三・二〇	玄奘
20	17	13	15	69	清浄句数
是菩薩	是菩薩位	是菩薩句義	是菩薩位	是菩薩句義	掲出型
於意云何 一切法自性空自性清浄 般若波羅蜜亦自性空自性清浄	何以故 一切法自性清浄 般若波羅蜜多清浄	何以故 一切法自性清浄 即般若波羅蜜多最勝清浄	何以故 一切法自性清浄 即般若波羅蜜清浄	所以者何 一切法自性空故自性遠離 遠離故自性寂靜 寂靜故自性清浄 清浄故甚深般若波羅蜜多最勝清浄	所以者何
	・欲箭 ・一切自在主 (愛縛) (慢)	(欠) 語		(総網羅) 一切有記無記法 有漏無漏有為無為法 世間出世間法 空寂	備考
8	8	8	6 欠 〔虚空庫 金剛拳	8	対告衆上座大菩薩
3,300	3,400	5,000	3,300	8,200	字数(約)

「清浄」について (大西)

6
九九九 法賢
16
是句 即菩提句
所以者何 諸法自性清浄 故般若波羅蜜多亦清浄
識 妙 欠 8 識 吉 文 那 祥 殊 嚙 惹
58,500